

2010 年度受託研究概要報告

# 国登録文化財建造物に残る民具の活用等業務

## 研究メンバー

川北健雄	デザイン学部環境・建築デザイン学科教授
長濱伸貴	デザイン学部環境・建築デザイン学科准教授
山之内誠	デザイン学部環境・建築デザイン学科准教授
金子晋也	デザイン学部環境・建築デザイン学科助手

## 委託者

三木市

## 研究概要

市に寄贈された国登録有形文化財である旧玉置家住宅と旧所有者が存置していた民具を効果的に活かし、市民や訪問者が文化財空間（建造物・民具・美術工芸品）を楽しめる場を造り上げることを目的として、文化財の活用展の開催とまちなか散策を楽しむ歴史文化ウォッチングを計画し実施した。

文化財の活用展については、保管されていた多くの民具の中から、七輪、釜、鍋、土瓶、湯呑み茶碗、火鉢、こたつ、ぼんぼり、銅壺、衣服、アイロンなど、「あたたかさ」のイメージにつながるものを抜粋して、それらを旧玉置家住宅の空間内に配置展示した。展示会のタイトルは「ぬくもりのいえ」とし、来訪者に展示物とそれが置かれた空間の両方を視覚的、触覚的に感じとってもらえるようにした。

歴史文化ウォッチングについては、「Play Town MIKI!」と題した親子参加による体験型ワークショップ形式の1日イベントを企画実施した。より具体的には、主催者側でいくつかの見学地を選定し、小学生を含む親子連れのグループ単位で複数の見学地を訪ね歩いてもらい、それぞれの場所の特性を活かした何らかの体験をしてもらう、という内容の1日型のイベントを開催した。市内各所の歴史文化資源が過去の遺物ではなく、今日でも実際に活用される地域資源であるということを理解してもらうことをねらいとした。見学地において何らかの体験をする度に、ポイントカードにスタンプを押し、獲得ポイントに応じて景品をだすなどのゲーム性を取り入れることで、子どもたちの参加意欲を高める工夫も行った。

## 研究成果

文化財の活用展「ぬくもりのいえ」には、5日間で283人の来場者があった。展示に関するアンケートを実施したところ74名から回答を得ることができ、17名（約23%）が古い市街地である三木地区の住民、15名（約20%）が新興住宅地の住民、32名（約43%）が三木市以外からの来訪者であった。年齢は、60代以上の回答者が約6割で、30代以下の大人は少ないという結果であった。展示のテーマ（ぬくもりのいえ）と展示方法についても評価してもらったところ、展示テーマ、展示方法の両方について、概ね良い評価が得られる結果となった。自由記述からは、このような展示会の実施が、多くの人々に昔の生活の様子を思い起こさせ、その価値を再認識してもらうのに役立ったことや、今後も同様の展示を行うことについての期待の存在を確認することができた。

歴史文化ウォッチング（Play Town MIKI!）には、大人33名、子ども46名、合計79名の参加者があった。イベント終了時に行ったアンケートから、参加者の1/3は古くからの市街地である地元の三木地区の人々であるが、新興住宅地からの参加者も半数近くいることがわかった。大人の参加者からは、このイベントに参加したことによって、まちの歴史や文化に対する知識が深まり、まちの中にある歴史的資源をより身近に感じるようになったといった内容の回答が多く得られ、子どもを対象としたアンケートの自由記述欄でも、様々な体験ができたことを楽しかったと答える例が多数みられた。

以上のように、文化財の活用展、歴史文化ウォッチング共、地元および周辺の人々に三木の歴史文化的資源に対する認識を深めてもらうのに役立ち、今後も継続的にこのような活動を実施していく意義を確認できた。



写真1 (左) ワークショップ受付風景 (右) 「ぬくもりのいえ」展示風景